

第57回名古屋春栄会  
演目のあらかし

平成31年1月6日

名古屋春栄会事務局

## 目 次

翁（おきな）	1
高砂（たかさご）	2
半部（はしとみ）	3
難波（なにわ）	4
松虫（まつむし）	5
江口（えぐち）	6
嵐山（あらしやま）	7
采女（うねめ）	8
難波（なにわ）	9
小鍛冶（こかじ）	9
田村（たむら）	10
小袖曾我（こそでそが）	11
猩々（しょうじょう）	12
〔能のミ二知識〕	13

このリーフレットは、第57回名古屋春栄会の演目を解説したものです。  
演目の記載順は、番組の順です。  
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

## 翁（おきな）

---

【作 者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穰を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」とい2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸ひ心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおはしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

<翁舞>

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

## 高砂（たかさご）

---

【分類】初番目物（脇能＝男神物） \*神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をする、それは奇なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

げにさまざまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。壽福をいただき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声を楽しむ。さっさっの声を楽しむ。

## 半部（はしとみ）

---

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】内藤藤左衛門

【主人公】前シテ：里の女（面・増）、後シテ：夕顔の女の霊（面・増）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

京の都の紫野雲林院の僧が、90日にわたる夏の修行も終わりが近づいただったので、修行の間に仏に供えた花々の供養を行います。すると、白い花が開いたかのように、どこからともなく一人の女が現れて、花を捧げます。僧が女に名を尋ねると、ただ夕顔の花と答えるだけで、その名を明かしません。僧がさらに問いただすと、五条あたりの者とだけ言って、活けられた花の陰に消え失せてしまいます。

<中入>

僧が不思議な思いをしていると、ちょうどそのあたりの者がやって来て、光源氏と夕顔の物語を聞かせ、その女性は夕顔の幽霊であろうと述べて、僧に五条あたりへ弔いに行くことを勧めます。僧が五条あたりを訪ねてみると、荒れ果てた一軒の家に、夕顔の花が咲いています。僧が、夕陽が落ち、月がさし込むこの家の風情を眺め、『源氏物語』昔を偲んでいると、半部を押し上げて、一人の女性が現れます。女は、光源氏と夕顔の花の縁で歌を取り交わし、契りを結んだ楽しい恋の思い出を物語り、舞を舞います。そして、夜明けを告げる鐘と共に僧に別れを告げ、また半部の中へ消えてしまいます。しかし、そのすべては僧の夢の中のことでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

折りてこそ。それかとも見ぬ。たそかれに。ほのぼの見えし。花の夕顔。花の夕顔。  
花の夕顔。終の宿りは知らせ申しつ。常には弔らい。おわしませと。木綿附の鳥の  
音。鐘もしきりに。告げわたる東雲。あさまにもなりぬべき。明けぬ先にと夕顔の  
宿り。明けぬ先にと夕顔の宿りの。また半部の内に入りて。そのまま夢とぞ。なり  
にける。

## 難波（なにわ）

---

【分類】初番目物（脇能） ＊楽

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：王仁（面・悪尉）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

廷臣が従者と共に熊野から京の都に帰る途中、難波に立ち寄ります。すると杉箒を持った老翁が連れの男と共に現れ、天下泰平の春を詠いながら、梅の木陰を掃き清めます。廷臣が老人たちに梅の木のいわれを尋ねると、老翁は難波津の歌、仁徳帝の慈愛、難波の都の平和と繁栄について語り、自分は仁徳帝の即位を推進した百済国の王仁であると名乗り、舞楽を舞うことを約して立ち去ります。

<中入>

難波の春の夜に木華開耶姫と王仁が現れて名乗ります。そして木華開耶姫が梅の花を詠じて舞を舞います。続いて王仁が難波を祝福して舞楽を舞います。舞楽のうちの古の聖賢をたたえ、治世を祝福します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

あら面白の音楽や。あら面白の音楽や。時の調子にかたどりて。春鶯囀の楽をば。春風ともろともに。花を散らしてどうど打つ。秋風楽はいかにや。秋の風もろともに。波を響かしどうど打つ。万歳楽は。よろず打つ。青海波とは青海の。波立て打つは。採桑老。抜頭の曲は。返り打つ。入り日を招き返す手に。入り日を招き返す手に。今の太鼓は波なれば。寄りては打ち、返りては打つ。この音楽に引かれて。聖人御代にまた出で。天下を守り治むる。天下を守り治むる。万歳楽ぞめでたき。万歳楽ぞめでたき。

## 松虫（まつむし）

---

【分類】四番目物（雑能） ＊男舞

【作者】観阿弥原作、世阿弥改作

【主人公】前シテ：市人（直面）、後シテ：男の亡霊（面：真角）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

摂津国（大阪府）安倍野のあたりに住み、市に出て酒を売っている男がいました。そこへ毎日のように、若い男が友達と連れ立って来て、酒宴をして帰ります。今日もその男たちがやって来たので、酒売りは、月の出るまで帰らぬように引き止めます。男たちは、酒を酌み交わし、白楽天の詩を吟じ、この市で得た友情をたたえます。その言葉の中で「松虫の音に友を偲ぶ」と言ったので、その訳を尋ねます。すると一人の男が、次のような物語りを始めます。昔、この安倍野の原を連れ立って歩いている二人の若者がありました。その一人が、松虫の音に魅せられて、草むらの中に分け入ったまま帰って来ません。そこで、もう一人の男が探しに行くと、先ほどの男が草の上で死んでいました。死ぬ時はいっしょにと思っていた男は、泣く泣く友の死骸を土中に埋め、今もなお、松虫の音に友を偲んでいるのだと話し、自分こそその亡霊であると明かして立ち去ります。

<中入>

酒売りは、やって来た土地の人から、二人の男の物語を聞きます。そこで、その夜、酒売りが回向をしていると、かの亡霊が現れ、回向を感謝し、友と酒宴をして楽しんだ思い出を語ります。そして、千草にすだく虫の音に興じて舞ったりしますが、暁とともに名残を惜しみつつ姿をかくします。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

面白や。千草にすだく。虫の音の。機織るおとは。きりはたりちょう。きりはたりちょう。つずり刺せちょうきりぎりすひぐらし。いろいろの色音の中に。別きて我が忍ぶ。松虫の声。りんりんりんとして夜の声。冥々たり。すはや難波の鐘も明方の。あさまにもなりぬべき。さらばよ友人名残の袖を。招く尾花のほのかに見えし。跡絶えて。草ぼうぼうたる朝の原の。草ぼうぼうたる朝の原。虫の音ばかりや。残るらん。虫の音ばかりや。残るらん。

## 江口（えぐち）

---

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】観阿弥

【主人公】前シテ：里の女（面：小面）、後シテ：江口の君（面：小面）

【あらすじ】（今回の独吟〔クセ〕の部分…下線部）

諸国一見の旅の僧が、津の国（大阪府）天王寺へ参ろうとして、その途中、江口の里に着いたので、土地の人に尋ねて、江口の君の旧跡を教わります。そこで昔、西行法師がここで宿を求めたが、遊女に断られ、「世の中を いとふまでこそ かたからめ 仮の宿りを 惜しむ者かな」という歌を詠んだことを思い出し、それを口ずさみます。すると、いずこからともなく一人の女が現れ、それは断ったのではなく、出家の身を思って遠慮したのだと説明し、あなたも僧侶の身として、そうした俗世の事に心を留めない方が良いと言います。僧が女の名を尋ねると、江口の君の幽霊であると明かして、たそがれの川辺に消え失せます。

<中入>

旅僧は、先程の江口の里の男から、この里の遊女が、普賢菩薩の化現であったという話を聞き、奇特の思いに、夜もすがら読経していると、月澄みわたる川面に、江口の君や遊女たちが舟遊びする光景が見えてきます。そして、彼女たちはその身の境涯を語り、そのはかなさを嘆くと共に、この世の無常を述べます。そしてさらに舞を舞い、この世への執着を捨てれば迷いは生じないと仏教の奥義を説き、やがてその姿は普賢菩薩と変じ、舟が白象となると、それに乗って、西の空へと消えてゆきます。

【詞章】（今回の独吟〔クセ〕の部分の抜粋）

紅花の春のあした。紅錦繡の山。装おいをなすと見えしも。夕べの風に誘われ黄葉の秋の夕べ。黄纈纈の林。色を含むといえども。朝の霜にうつろう。松風羅月に。言葉を交わす賓客も。去つて来たることもなく。翠帳紅閨に。枕を並べし妹背も。いつの間にかは隔つらん。およそ心なき草木。情ある人倫。いずれ衰れをのがるべき。かくは思い知りながら。ある時は色に染み。貪着の思い浅きからず。またある時は声を聞き。愛執の心いと深き。心に思い口に言う。妄染の縁となるものを。げにや皆人は。六塵の境に迷い。六根の罪を作ることも。見る事聞く事に。迷う心なるべし。



## 嵐山（あらしやま）

---

【分類】 初番目物（脇能＝荒神物） ＊中ノ舞

【作者】 金春禅鳳

【主人公】 前シテ：花守の老人（面・小尉）、後シテ：蔵王権現（面・大飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

嵯峨帝に仕える臣下が、勅命を受けて、嵐山へ桜の咲き具合を見に行きます。というのは大和吉野山が桜の名所であることは有名ですが、あまりに都から遠いので、花見の御幸も簡単にはできません。それで吉野の千本の桜を、都近くの嵐山に移し植えられましたが、吉野の花が今は盛りだというので、嵐山の花もよく咲いているのではないかと、というお尋ねがあったからです。勅使一行が嵐山につくと、老人夫婦が現れ、木陰を清め、花に向かって祈念します。勅使がその謂れを聞くと、老人夫婦は、この千本の桜は、吉野から移されたものだから、木守、勝手の二神が時折現れて守護する神木であり、嵐という名だが、花を散らさないのだと語ります。やがて自分達こそ木守、勝手の神なのだと言乗り、再会を約して、雲に乗って吉野の方に飛び去ります。

<中入>

そのあと、蔵王権現の末社の神が現れ、勅使一行に対して舞を舞ってもてなしていると、木守、勝手の二神が今度は神の姿で現れ、嵐山の美景を眺めつつ舞楽を奏します。続いて蔵王権現も現れて、衆生の苦患を助け、国土を守ると誓い、栄ゆる御代を祝福します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

和光利物の御姿。和光利物の御姿。我本覚の都を出でて。分段どうごの塵に交わり。金胎兩部の一足をひっさげ。悪業の衆生の苦患を助け。さて又虚空に御手を上げては。たちまち苦海の煩惱を払い。悪魔降伏の青蓮のまなじりに。光明を放つて。国土を照らし。衆生を守る。誓を現わし。子守勝手。蔵王権現一体分身同体異名の姿を見せて。おのおの嵐の山によじ登り。花にたわむれ梢にかけって。さながらここも黄金の峰の。光も輝く千本の桜。光も輝く千本の桜の。栄ゆく春こそ。久しけれ。

## 采女（うねめ）

---

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：里女（面・小面）、後シテ：采女の霊（面・小面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

諸国をまわって歩いている旅の僧が、京都の寺々もほぼ見終わったので奈良へやって来ます。そして、春日の里につき、春日明神へ参詣します。すると、そこへ一人の女性がやって来て、木を植えます。僧が不審に思って言葉をかけると、その女性は、春日の神の由来、木を植えることの原因などを、詳しく話します。続いてその女性は、僧を猿沢の池に案内し、帝の寵愛を失った朱女が、ここに入水したという物語をし、実は自分はその采女の幽霊だと告げて、池の底に姿を消します。

<中入>

僧は不思議な思いで、ちょうどやって来た土地の人に、もう一度春日の社の縁起と采女の死のことを尋ねます。里人も僧の会ったという女性の話を聞き、それは采女の亡霊だから、弔ってやるように勧めます。僧が回向をしていると、采女の亡霊が現れ、弔いを受けたことを喜び、仏教説話にあるように自分も変成男子となり、成仏して極楽に生れたことを述べます。続いて采女というものが、いかに人の心を和ませるのに役立ったかを語り、宮廷の酒宴の場で興を添えたときのことを思い起こして、舞を舞います。そして、御代を祝福しつつ、再び池の中へ消えて行きます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

葛城の王勅に従い陸奥の。忍ぶもぢずり誰もみな。こともおろそかなりとて。設けなんどしたりけれど。なおしもなどやらん。王の心解けざりしに。采女なりける女の。かわらけ取りし言の葉の。露の情に心解け歡感もって甚し。されば浅香山。影さえ見ゆる山の井の。浅くは人を思うかの。心の花開け。風もおさまり。雲静かに。安全をなすとかや。しかれば采女の戯れの。色音に移る花鳥の。とぶさに及ぶ雲の袖。影もめぐるや杯の。御遊のみ酒のおりおりは采女の衣の色添えて。大宮人の小忌衣。桜をかざす朝より。今日もくれはどり。声のあやをなす舞歌の曲。拍子を揃え。袂をひるがえして。遊楽回雪たる。采女の衣ぞ。妙なる。

## 難波（なにわ）

---

〔4ページ参照〕

## 小鍛冶（こかじ）

---

【分 類】五番目物（略脇能＝鬼畜物、靈験物） ＊舞働

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：童子（面・童子）、後シテ：稲荷明神（面・小飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

一条天皇がある夜に不思議な夢を見られたので、橘道成を勅使として、当時名工として知られた三条の小鍛冶宗近に御剣を打つことを命ぜられます。宗近は宣旨を承りはしたものの、優れた相槌の者がいないので途方にくれ、この上は奇特を頼むほかはないと、氏神である稲荷明神へ祈願のために出かけます。すると童子が現れ、不思議にも既に勅命を知っており、君の恵みによって御剣は必ず成功すると安心させます。そして、和漢の銘剣の威徳や故事を述べ、特に日本武尊の草薙剣の物語を詳しく語って聞かせ、神通力によって、力を貸し与えようというて、稲荷山に消えていきます。

<中入>

宗近は、しめ縄を張った壇をしつらえ、仕度を調べて、祝詞を唱えて待ち構えます。すると、稲荷明神の使わした狐が現れ、相槌となって御剣を打ち上げ、表に小鍛冶宗近、裏に小狐と銘を入れ、勅旨に捧げると、再び稲荷山に帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

天下第一の。天下第一の。二つの銘の御剣にて。四海を治めたまえば。五穀成就もこの時なれや。すなわち汝が氏の神。稲荷の神体小狐丸を。勅使にささげ申し。これまでなりと言ひ捨ててまた。むら雲に飛び乗り。またむら雲に飛びのりて東山。稲荷の峰にぞ。帰りける。

## 田村（たむら）

---

【分 類】二番目物（修羅物＝勝修羅） ＊カケリ

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：童子（面・童子）、後シテ：坂上田村麻呂の霊（面・平太）

【あらすじ】（今回の連吟の部分…下線部）

東国の僧が、都見物に来て、3月半ばに清水寺に着き、爛漫と咲いたそがれ時の桜花に見とれていると、箒を手にした一人の童子が現れ、その木陰を清めます。そこで、僧がこの寺の来歴を尋ねると、それに応じて、清水寺建立の縁起を詳しく語ります。また、あたりの名所を教え、ともに桜月夜の風情を楽しみます。その様子が常の人とはどうも違うのを訝った僧が、童子に名を尋ねると、我が名を知りたいのならば帰る方を見て下さいと、田村堂の内陣へと姿を消します。

<中入>

僧が夜通して桜の木陰で経を読んでいると、威風堂々たる武将姿の坂上田村麻呂の霊が現れます。そして、勅命を受けて、鈴鹿山の賊を討伐すべく軍を進めたが、合戦の最中に干手観世音が出現し、その助勢によって、敵をことごとく滅ぼした様子を語り、これも観音の仏力であると述べます。

【詞章】（今回の連吟の部分の抜粋）

春宵一刻値千金。花に清香。月にかげ。げに千金にもかえじとは。今この時かや。やらやら面白の。地主の花や候かな。桜の木の間にもる月の。雪もふる夜嵐の。誘う花とつれて。散るや心なるらん。さぞな名にし負う。花の都の春の空。げに時めける粧い。青陽の陰みどりにて。風のどかなる。音羽の滝の白糸の。くり返し返しても。面白やありがたやな。地主権現の。花の色もことなり。ただ頼め。標茅が原のさしも草。われ世の中に。あらん限りはのご誓願。濁らじものを清水の緑もさすや青柳の。げにも枯れたる木なりとも。花桜木の粧い。いづくの春もおしなべて。のどけき影は有明の。天も花に酔えりや。面白の春べや。あら面白の春べや。

## 小袖曾我（こそでそが）

---

【分類】 四番目物（現在物） \*男舞

【作者】 不詳

【主人公】 シテ：曾我十郎祐成（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

曾我十郎と五郎の兄弟は、源頼朝が富士の裾野で巻狩を行うので、この機会に親の敵工藤祐経を討とうと決心します。そうして、それとなく暇乞いをするため、また、五郎の勘当の許しも得ておこうと、母のもとを訪れます。まず、十郎が案内を求めると、母は喜んで迎え入れますが、五郎には出家になれという母の命にそむいたというので怒って会おうとしません。十郎はこのたび兄弟そろって御狩に出ようとしたのに、弟を許してくださらないのは、私の身をも思ってくださいらないことになるのです。また、五郎は箱根にいた間母上のことを思い、亡き父の回向に心を尽くしていたのですと、いろいろと弟のためにとりなし、母に怨みを述べて、弟と共に立ち去ろうとします。すると兄弟の心が通じ、母もようやく五郎の勘当を許します。二人は喜びの酒を酌み交わし、共に立って舞い、これが親子最後の対面かと名残もつきませんが、狩場に遅れてはならぬと、母に別れのあいさつをして、勇んで出立します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

舞のかざしのその隙に。舞のかざしのその隙に。兄弟目をひき。これや限りの親子の契りと。思えば涙も尽きせぬ名残。牡鹿の狩場に遅参やあらんと。暇申して帰る山の。富士野の御狩の折を得て。年来の敵。本望を遂げんと。互に思う瞋恚の焰。胸の煙を富士おろしに。晴らして月を清見が関に。終にはその名をとめなば兄弟。親孝行の。ためしにならん。嬉しきよ。

## 猩々（しょうじょう）

---

【分 類】五番目物（祝言物） \*中ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰って行きました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変らぬ。秋の夜の盃。影も傾く入江に枯れ立つ。足元はよろよろと。酔いに伏したる枕の夢の。覚むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。

## 能のミニ知識

### ★能の分類

**五番立て**…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

#### ○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

#### ○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

#### ○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

#### ○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

#### ○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

### ★能の楽器

**囃子方[はやしかた]**…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

**笛(能管)**:竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

**小鼓**:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

**大鼓**:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

## ★略式の演能

### 素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

### 独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

### 連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

### 仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

### 舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

### 袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

### 半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

### 独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

### 一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

### 一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

### 素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

### 番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。



## ★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。  
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>